

第1分科会

あなたの大学の学習環境を教えてください！

分科会概要：

近年、大学において正課外での学びや、正課と正課外を結びつける学習の場と機会の提供が進んでいる。一方で、大学教育の潮流は激しさを増している。これまでの18歳人口の減少という風潮に加えて、コロナ渦による乱流が生じ、水先は一層見えにくくなっている。このような状況の変化と多様な学生に対応するうえで、大学教育を支える学習環境の議論はますます重要となっている。本分科会では、学習環境のキーワードである、「ラーニング・コモンズ」、「ラーニング・アシスタント」、「学習支援」について、先進的な取り組みを行っている大学の事例を共有し、議論を深めていく。

本分科会では、3人の先生にご所属の大学の事例を報告いただき、その後の質疑応答を経て、参加者全員での議論を行う。

<プログラム>

9:30 趣旨説明

京都橘大学 経営学部 専任講師 多田 泰紘 氏

9:40 講演1. 「学習空間とその接点」

同志社大学 学習支援・教育開発センター 准教授 澤 宏司 氏

10:05 講演2. 「正課・正課外で学びを支援するラーニング・アシスタントの取り組み」

甲南大学 全学教育推進機構 全学共通教育センター 准教授

千葉 美保子 氏

10:30 講演3. 「自律的な書き手を育むためのライティングセンターにおける
10年の歩み」

関西大学 教育推進部 教授 岩崎 千晶 氏

10:55 休憩・質問受付

11:00 質疑応答・全体討論

第2分科会

産学連携・地域連携を通じた大学教育を考える

分科会概要：

大学と産業界との連携（産学連携）や大学と地域との連携（地域連携）は、研究面においてオープンイノベーションや社会実装を推進する場として、様々な取り組みがなされている。そうした学外との協働活動は、教育面でも、学生が広く社会に目を向け、主体的に実践的な学びを得る場として貴重であるとともに、多様な人間関係を築く絶好の場でもある。しかし、実際にその場を提供しようとする、課題も多い。本分科会では、企業との共同研究や地域連携（講演1）、自治体と協働した地域貢献の取り組み（講演2）、学生と地域をつなげる行政サイドのプロジェクト（講演3）について話題提供いただき、産学連携や地域連携における大学の教育のあり方や運営方法について考えたい。

<プログラム>

9：30 趣旨説明

京都先端科学大学 バイオ環境学部 教授 船附 秀行 氏

9：35 講演1. 「帯広畜産大学および研究室における産学連携・地域連携の取り組み」

帯広畜産大学 生命・食料科学研究部門 教授 高田 兼則 氏

10：00 講演2. 「学生の地域における活動事例～環境先進都市・亀岡市をともにめざす～」

京都先端科学大学 バイオ環境学部 准教授 高澤 伸江 氏

亀岡市 環境先進都市推進部 部長 山内 剛 氏

10：35 講演3. 「地域活動と大学での学び

～京都府『学生×地域つながる未来プロジェクト』を通して～

京都府 政策企画部地域政策室 主事 間崎 涼花 氏

京都府 政策企画部地域政策室 協働コーディネーター 田村 祥代 氏

京都府 政策企画部地域政策室 協働コーディネーター 國府 美紀 氏

11：05 休憩

11：15 質疑応答・全体討論

第3分科会

学びの場のダイバーシティとインクルージョンの実現

分科会概要：

長引くコロナ禍により、よりよい学びの場づくりのために学生と教員と職員の挑戦・奮闘が重ねられている。その中には障がい（障害・障碍）のある学生のオンラインでの学習環境の共創も1つに挙げられる。

振り返れば2002年、大学コンソーシアム京都は「障害のある学生の支援に関する支援者養成講座」を通じ、「今、何が話されているのか」をリアルタイムに聴覚障害学生に伝えることで、同じ時間と空間を共にしている学習者どうしで疎外感が生じることがないように、講義の情報保障を実現するための取り組みを開始した。さらに時間を遡れば、大学コンソーシアム京都による京都地域の障害学生支援は、2001年2月19日に産経新聞夕刊に掲載された記事「難聴者に代わり講義筆記 ノートテイカー」を契機として、「京都の大学における障害学生支援に関するアンケート」が実施される運びとなり、その結果は2002年3月27日の第7回FDフォーラム第5分科会で報告されている。

20年の時を経た今、合理的配慮の努力義務の先を見据えつつ、大学入学へのアクセスと学修環境のユニバーサルデザインの両面から、多様な人々の学びと成長の環境はいかにして実現しうるのかを問う好機にある。実際、大学コンソーシアム京都における支援の型とした同志社大学では学内の支援制度発足20年を迎えた2021年4月に障がい学生支援室をスチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室へと改組、また京都大学では既存の障害学生支援の部署を2022年4月に改組し、DRC（Disability Resource Center／障害学生支援部門）が設置されたことも踏まえ、ダイバーシティとインクルージョンの観点から探究する。

<プログラム>（敬称略、進行・内容には変更が生じる可能性があります。）

- 14：00 趣旨説明 立命館大学 共通教育推進機構 山口 洋典
- 14：05 鼎談「障害学生支援におけるコロナ禍の影響と大学間連携の現状と課題」
同志社大学 土橋 恵美子、京都大学 村田 淳、立命館大学 山口 洋典
- 15：00 休憩
- 15：10 話題提供「合理的配慮の合理性とバリアフリーへのバリア」
東京大学大学院 教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター
星加 良司
- 15：55 参加者との対話
- 16：25 まとめ
- 16：30 終了

<交流会>16:30~17:00 ※交流会への参加は任意です

本分科会では終了後30分を参加者の皆さんとの感想交流の場を設けます。より多くの方にご発言の機会を得ていただくためにも、25名以上の方にご参加いただいた場合には、ブレイクアウトルームの機能を使用する予定です。

第4分科会

25年度新入生は何をどう学んで来るのか（来ないのか）

—新指導要領を手がかりに大学基礎教育を考える—

分科会概要：

今から2年半後の2025年度、新学習指導要領に沿って学んだ新入生が大学に進学してくる。

新指導要領は「生涯にわたって探究を深める未来の創り手」の育成を掲げ、「主体的・対話的で深い学び」を実現するとしている。では、実際に初等中等教育はどのように変化するのだろうか。とくに、教育格差が深刻化・固定化する社会を打破する原動力としての「相互理解の基盤」となるべき基礎教育はおろそかになっていないだろうか。分科会では、学習指導要領の「理念」と「実装」を俎上に上げ、小中高大を貫く基本的な学びのあり方を考えたい。

<プログラム>

14：00 開会

14：05 報告1. 「学習指導要領の質的転換の経緯と現状について」(仮)
文化庁 次長、元・初等中等教育局教育課程 課長 合田 哲雄 氏

14：35 報告2. 「新要領に対する学校現場における受け止めと課題」(仮)
岐阜聖徳学園大学 教育学部 教授 玉置 崇 氏

15：05 報告3. 「総合的な探究の時間を考える
—フランスの高校における哲学教育との比較」(仮)
京都薬科大学 基礎科学系 准教授 坂本 尚志 氏

15：35 休憩

15：45 指定討論
京都教育大学 教育学部 准教授 神代 健彦 氏

16：05 全体討論

17：00 閉会

<コーディネーター>

京都薬科大学 基礎科学系 教授 上野 嘉夫 氏
龍谷大学 社会学部 准教授 築地 達郎 氏

第5分科会

グローバルに活躍出来る人材の教育に大学はどのように貢献するか

—混沌とした世界で主体性を発揮できる人材の育成に向けて—

分科会概要：

世界は混沌とした時代に突入し、今後このような状況が世界を覆い、続いていくことが想定される。一方、世界のグローバル化はますます進行し、世界の人々が共生しなければならない未来が我々の前に横たわっている。このような状況にあって今後日本の教育はどのような人材を育てるのかというテーマは重要なテーマであり、なかでも新しい世界を構想していくことが出来る創造的で主体的な人材の育成は我が国はもとより世界的にも重要なテーマと考える。グローバルに活躍出来る主体的人材の育成に日本の大学また教育界はどのように貢献できるかというテーマについてこの分科会のみなさんと議論したい。このセッションでは、小学校から大学までを連続した教育の過程と捉え、世界で活躍することができる主体性とはどのようなもので、また、どのような方法で育成出来るか等、既存の教育システムにとらわれない教育方法を実践してこられた教育現場の方、研究者を招いて分科会を行いたい。

<プログラム>

14：00 趣旨説明

同志社女子大学 学芸学部 教授 川田 隆雄 氏

14：10 講演 1. 「自ら考える子どもを育てるための教育」

学校法人きのくに子どもの村学園 理事長・学園長 堀 真一郎 氏

15：00 休憩

15：10 講演 2. 「生徒たちの主体性を育む環境づくり～学校の「常識」を疑え！」

特定非営利活動法人 Glocal NET 代表、コリア国際学園 前校長、
大阪つくば開成高等学校 教員 金正泰 氏

15：40 講演 3. 「世界に学ぶアントレプレナーシップ：

主体性を発揮できるイノベーション人材の育成に向けて」

徳島大学 副学長（テクニオン連携担当）福井 清 氏

16：10 休憩

16：20 ディスカッション

17：00 分科会終了

<交流会>17：00～17：30 ※交流会への参加は任意です

大学において学生の主体性を育てる環境をどのように作るかに関して、交流会を開催し参加者それぞれが意見を自由に交換しあい、具体的な行動プランなどを考えたいと思います。

第6分科会

大学教育と福祉課題

～大学での支援のあり方を考える～

分科会概要：

大学には、さまざまな障害を持ちながら学ぶ学生がいる。大学生活の中で、初めて障害に気づくことになる学生もいる。ヤングケアラーであったり、経済的な問題などを抱えている学生も存在し、大学の中で「福祉課題」が顕在化することがある。こうした学生たちは、授業やゼミで学習に集中できない状況によって自信を失ったり、自己実現の機会を奪われていることも多い。

しかしながら、福祉課題を抱える学生を発見しづらい状況があり、特に発達障害や生活面での課題は潜在化しやすい。さらに、学生が直面する困難に対して、大学はどのように支援したら良いのか戸惑うことも多い。本分科会では福祉課題を抱える学生の発見や具体的な支援のあり方について、実際に学生をサポートする教職員や子ども・若者支援に関わる外部機関から報告者を招き、大学教育での福祉課題に対するサポートのあり方を検討する。

<プログラム>

9：30 趣旨説明

大谷大学 社会学部 准教授 中野 加奈子 氏

9：35 講演 1. (タイトル未定)

大谷大学 学生支援部 キャリアセンター チームリーダー／
障がい学生支援チーム 伊東 みさき 氏

9：55 講演 2. (タイトル未定)

公益財団法人京都市ユースサービス協会 事務局次長 松山 廉 氏

10：20 講演 3 (タイトル未定)

佛教大学 副学長／社会福祉学部 教授 岡崎 祐司 氏

10：40 休憩 (質問・コメントの受け入れ)

10：45 ディスカッション

司会 佛教大学 社会福祉学部 講師 孔 栄鍾 氏

11：15 質疑応答

第7分科会

ポストコロナで遠隔授業をどのように活用できるか

分科会概要：

新型コロナウイルスの感染拡大による大学休講措置は、新たな教育方法を見出す契機となった。遠隔授業（オンライン授業）はその最たるものであろう。新型コロナウイルス感染症との付き合い方を知り、通常の生活に戻りつつある現在、多くの大学では対面授業が再開している。文部科学省の調査によれば、2022年度前期の授業を「半数以上を対面授業とする」と答えた大学等は1,165校中1,157校（99.3%）、「7割以上と対面授業とする」と答えた大学等は1,116校（95.8%）に上っている。しかし、「遠隔授業」には利点も多くある。遠く離れた大学との共同学習のしやすさ、チャットでの一対一の対応が可能になったことで学生との距離が近づいた大人数対象の講義、場所を選ばず授業ができる・受けられる利便性などである。せっかく獲得した「遠隔授業」の技術、設備を今後活用しないのはあまりにももったいないのではないか。そこで、本分科会では①DXを活用した授業運営 ②他大学との協働授業 ③海外からのオンライン授業の3つの事例を取り上げ、ポストコロナでの遠隔授業の可能性について考えてみたい。

<プログラム>

9：30 趣旨説明

京都外国語大学 外国語学部 教授 畑田 彩 氏

9：40 「イマーシブテクノロジーとヴァーチャルトラベルによる文化交流」

京都外国語大学 国際貢献学部 教授 エリック・ハーキンソン 氏

※ エリック・ハーキンソン氏の講演は日本語で行われますが、スライドについては英語になる可能性がありますので、あらかじめご了承ください。

10：10 休憩

10：15 「COIL3.0を共創する一次代の国際教育のあり方の探求」

関西大学 国際部 教授 池田 佳子 氏

10：45 休憩

10：50 「遠隔地からの授業の利点や限界——教員側の視点から」

京都外国語大学 非常勤講師 前川 愛 氏

11：20 休憩

11：25 質疑応答・パネルディスカッション

第 8 分科会

その能力、どうしたら社会で活かせる？

—発達障害のある理工系学生の能力を

専門職就労につなげるために必要な支援と課題—

分科会概要：

発達障害のある学生は得意・不得意の差が大きく、高い能力を持っている場合でも、コミュニケーションの不得手やこだわりの強さといった特性や、そもそもの発達特性のわかりにくさから、社会・企業の期待とのマッチングに困難が生じやすい。発達障害のある人の中には、いわゆる理工系分野に高い能力や資質をもっている人がいる。しかしながら、その能力が実際に社会で活かされるには、学生本人および学生を受け入れる企業・社会の間に、現状、様々なハードルや課題があると思われる。

本分科会では、大学・企業・公的就労支援機関より、今まきに行っている取り組みについてご報告いただき、まずはそれぞれの立場での「今、取り組んでいること・課題となっていること」を共有していくことで、今後の示唆となる議論につなげたい。

<プログラム>

14：00 趣旨説明

京都ノートルダム女子大学 現代人間学部 教授 三好 智子 氏

14：05 講演 1. 大学・支援部署からの報告

京都工芸繊維大学 アクセシビリティ・コミュニケーション支援センター
特定教授 藤川 洋子 氏

14：35 講演 2. 企業からの報告

オムロン京都太陽株式会社 人事総務課 精神保健福祉士 佐野 友字子 氏

15：05 講演 3. 公的就労支援機関からの報告

京都新卒応援ハローワーク 就職支援ナビゲーター 乾 智子 氏

15：35 質疑応答・ディスカッション

第9分科会

学生が過ごしたコロナ禍の大学生活

分科会概要：

2020年4月から新型コロナウイルス感染症予防対策として、各大学はキャンパスの閉鎖やオンライン授業の実施など、様々な対応をしてきた。その中で、特に2020年度入学者（現3年次生）は入学直後からコロナ禍の大学生活を過ごすことになり、社会状況や大学の対応に振り回されながら大学生活を過ごしてきたと言える。「可哀想」と言われることも多い彼らだが、実際はどのような大学生活を経験してきたのか。

本分科会では、①全国の大学生を対象とした量的調査の結果（山田氏）、②2020年度入学生を対象としたインタビュー調査の結果（佐藤氏）、③コロナ禍の学生生活の実践報告（江崎氏）の3つの報告をもとに、コロナ禍の大学生活を学生視点から紐解きたい。そして、後半のワークショップ（会場参加のみ）では、「通常大学生活」とは何かについてや、学生を理解するためにはどういった調査や情報収集と構成員や学生への共有方法があるといいのかを皆さんで検討したい。

<プログラム>

14:00 趣旨説明

京都文教大学 総合社会学部 助教 中西 勝彦 氏

14:10 講演1. 「コロナ禍がもたらした学生生活の変化と成長・発達への影響

～大規模学生調査の結果を踏まえて～

関西大学 教育推進部 教授 山田 剛史 氏

14:40 講演2. 「2020年度入学生を対象としたインタビュー調査の結果」

京都大学 教育学研究科 准教授 佐藤 万知 氏

15:10 講演3. 「コロナ禍における学生の課外活動についての実践報告」

京都文教大学・短期大学 社会連携部 フィールドリサーチオフィス 職員

江崎 洋子 氏

京都文教大学 地域連携学生プロジェクト 商店街活性化隊しあわせ工房 CanVas
学生3名

15:40 休憩

15:50 パネルディスカッション

16:30 オンライン開催 (Zoom) 終了

16:30 意見交換ワークショップ (会場参加の方のみで行います)

テーマ「通常大学生活とは何か」「学生理解のための方法とは」

17:30 終了

第 10 分科会

社会と融合する大学教育のかたちを考える

分科会概要：

日本が直面する現代の社会課題に、少子高齢化に伴う生産人口の縮小、それに伴う国際競争力の低下や産業・就業構造の総体的な劣化、地方と都市、社会・経済格差の拡大などがある。地域再生と生涯学習の基盤となるべく、大学教育に寄せられる期待は大きい中で、「社会に開かれた」「社会と併走する大学」の具体イメージは像を結んでいない。

具体的な産学連携だけでなく、産官学民連携でこれらの課題に挑戦するためには、従来型の企業内研究者（ハイ・タレント・マンパワー）の育成だけでなく、人材離散型の研究・教育システムの運用が必要となるだろう。本分科会ではそれらの未来について、実践事例を通じて検討してみたい。

<プログラム>

- 9：30 趣旨説明 「大学発ベンチャーの現状と課題ー社会化する大学の現在ー」
同志社大学 文化情報学部 准教授 津村 宏臣 氏
- 9：50 講演 1. 「フィールドミュージアムを通じた大学教育と社会実践の“かたち”」
京都外国語大学 国際貢献学部 教授、
NPO 法人フィールドミュージアム文化研究所 代表理事 南 博史 氏
- 10：20 講演 2. 「技術研究開発企業の“かたち”からみた大学・学会など学術界の風景」
東北電子産業株式会社 東京支店 支店長 佐藤 哲 氏
- 10：50 講演 3. 「測量・資源調査企業と大学教育、研究支援の“かたち”」
株式会社相互技研 京都事務所 所長、
同志社大学 文化遺産情報科学調査研究センター 副センター長
渡邊 俊祐 氏
- 11：20 質疑応答

第 11 分科会

学外の実践活動を生かした大学教育

分科会概要：

急速な社会環境の変化とともに、さまざまな規模の社会課題が生まれている。大学教育においても学内だけの活動では難しい局面に立たされており、学外との接続を有効に活用した教育実践が急務になっている。従来からの「文系」「理系」「芸術系」という枠を超えた新しい発想が求められる今、暮らしやすい社会を生み出すための教育実践例を紹介する。具体的には、京都精華大学メディア表現学部で実践している全員必修の 2 年次の学外実習（インターンシップ）の実態について報告する。本学部は、2050 年の未来から今を見つめる「活動」を重視した教学指針のもと、プロジェクト遂行に必須の技術・表現・コミュニケーションを複合的に学ぶことを目的としている。こうした教育ミッションを軸にしながら、大学と連携企業の関わり方と学生の実践状況を紹介します。学外を意識した大学の実践教育のあり方についての議論を深める場にしたい。

<プログラム>

9：30 趣旨説明

京都精華大学 メディア表現学部 教授 小松 正史 氏

9：35 講演 1. 「大学で社会実践することの意義と可能性について」

京都精華大学 メディア表現学部 教授 吉川 昌孝 氏

10：00 講演 2. 「京都精華大学メディア表現学部における学外実習の実態」

京都精華大学 メディア表現学部 教授 大下 大介 氏

(聞き手：小松 正史 氏)

10：25 講演 3. 「社会実践する大学生を企業で受け入れる試み」

北近畿鉄道ビジネス株式会社 代表取締役 福原 習作 氏

10：50 休憩

11：00 ディスカッション